

## 判 官

早 野 龍 五 （物理学教室）

「判官」に読み仮名をつけよ，という問題にな  
んとお答えになりますか。「ハンガン」か、それ  
とも「ホウガン」か，などと急に聞かれると，さ  
てどちらだろうと考え込んでしまいますが，実は  
どちらでも良いらしい。国語辞典を見ると，両方

共に正解のように書いてあります。それでは，「判  
官びいき」はどうか。机上の国語辞典では，「は」  
の項にも「ほ」の項にもこの言葉が載っています。  
ちなみに，私が使っているワープロの辞書には  
「ハンガン」の読みは登録されていましたが「ホ

ウガン」は入っていませんでした。近ごろどうやら「ほうがん殿」は羽振りが悪いらしい。

判官と言うのは昔の官職名ですから、特定の個人を指す意味は本来無いはずなのですが、芝居の世界で「ほうがん殿」と言えば、これはユニークに源九郎判官義経を指す言葉となります。義経の世界を描いた作品は多く、義経千本桜、勧進帳など、いまでもしばしば上演されているのは御存じの通り。本物の義経は背が低く、それほど男前ではなかったそうですが、劇中の御大將は愁いを含んだ貴公子です。この悲劇の武将に肩入れする心情が即ち「判官びいき」という訳なのですから、やはり「ホウガンバイキ」と読むのが妥当なのでしょう。

一方、「ハンガン」と読んだらば、忠臣蔵。多くの家臣があることも省みず殿中で刀を抜いてしまった短慮な殿様、塩冶判官「エンヤハンガン」（実録では浅野内匠頭）が思い浮かびます。赤穂浪士に取材した芝居は、最近のテレビドラマや映画に至るまで数多くありますが、中でも忠臣蔵は二百数十年来演じ続けられ多くの名優が工夫を重ねてただけあって現代でも鑑賞に堪える名作だと思います。

ハンガンとホウガン。判官という字に関連する二人の話が、どちらも歌舞伎を代表する演目となっており、また、古来日本の心情をあらわすものとして論じられてきたのは偶然とはいえ面白い事です。

閑話休題。最近、外国の研究者仲間に手紙を送るのに電子メールを使う機会が多くなっています。これは使い始めると大変に便利なもので、まず第一に早い。今日出した手紙の返事はだいたい翌朝にはもらえます。実験データや論文の原稿なども、コンピュータのファイルをそのまま相手に送ることが出来るし、受け取った側でも再度タイプ入力する手間なしにデータを解析したり原稿を直したり出来る。国際会議のプログラムをどうするか相談したり、会議の出席登録を集めたり、コントリビューションを集めたりするのに電子メールを活

用する例もありますし、国際会議場で電子メールのアドレスを教え合う風景も多く見られるようになってきました。

電子メールの文化は若い世代のものかと言うとそんなことはないようで、コンピュータは使わないけれど電子メールのためにはキーボードにさわると言う老教授も結構おられる由。先日もヨーロッパ出発を控えて慌ただしい某教授に届いた電子メールを肩ごしに一瞥するなれば、仕事の手紙にあらずして、オペラ見物の日程の相談。そして、相手側からは来月の歌舞伎のプログラムの問い合わせ。電子メール文化が着実に育ちつつある一面を見た思いがしました

外国からお客様があるとしばしば歌舞伎に案内しますが、最初になにを観るかによってその人が歌舞伎を好きになるかどうかが大きく左右されます。平均的に言って、筋も構成もきちんとしていて現代劇に近い感覚で観られるものの方が違和感が無いようで、これははじめて歌舞伎を観る日本人にも当てはまるようです。

今年はたまたま国立劇場開場20周年にあたり、その記念行事として10, 11, 12と3カ月に亘って忠臣蔵が上演されます。忠臣蔵は初めて観ても十分に楽しめ、繰り返し観ても新しい発見のある芝居です。芝居が好きだと言うだけで特にまとまった講義ノートの用意があるわけではないのですが、ちょうど良い機会なので、駒場の全学ゼミで忠臣蔵を教材にして歌舞伎の入門講座を開こうと思いいちました。

忠臣蔵の芝居には、殿様が大事件を引き起こしていると言うのに持ち場を離れ、腰元とデートをしていた不心得者の若い侍が出てきます。その名は早野勘平。勘平は劇の半ばにして、討入に参加すること無く無駄な死に方をしてしまう悲劇の主人公ですが、一方、忠臣蔵の登場人物の中で一番の男前であるということ（になっている）でも有名です。

早野という姓はあまり多くある苗字ではないので、たまたま私と同姓のこの劇中の人物には、昔

から親近感を抱いてきました。今でこそ歌舞伎は  
芸術と言われ国の保護を受けていますが、昔は悪  
所だったことは御存じのとおり。物理の教官がと

んでもないものを教えたいと言い出したがために  
各方面の方々にご迷惑をおかけしましたこと、勘  
平さんに免じてお許しあれと云爾。